

ソローの“Uncommon Schools”が意味するもの

— 「生きた知性」と終わりなき自己の向上 —

神谷 有咲

要旨

ソロー (Thoreau) は, “uncommon schools” (Thoreau, 1971, p.108) という言葉によって, 人々が様々な知見の本質を学び, 目標達成に向けた営みを絶えず実行するという, 義務教育とは異なる教育の在り方を提起した. 人は誰も完成された存在ではないが, “uncommon schools”においては誰もが教師にも, 或いは生徒にもなり得るといふ. 又, “uncommon schools”と教育人間学概論 II における外部講師の方々との間には, 多様な知恵や知識を収集するという点, 教える者も教えられる者も絶えず学ぶことで自己の存在を更新し続けるという点に, 共通項を見いだせる. さらに, 多様な知識を学んで自己を高めていくことを目的とし, 成長し続ける者皆に開かれた場所だという点において, 日本の社会教育の場である公民館と“uncommon schools”との間に, 共通点があると分かる. この共通点を踏まえると, “uncommon schools”の設立を提起することで, アメリカの公立図書館に内在する「住民同士の交流」という側面を振興させたかったという, ソローの意図を読み取れる.

1. はじめに

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau) は, 19 世紀のアメリカに生きた文筆家である (ソロー, 1995b, pp.311-321). 彼は, 1845 年 7 月 4 日から 2 年 2 ヶ月 2 日の間, 文明社会から離れ, アメリカのマサチューセッツ州コンコード村に位置するウォールデン湖の畔に, 自らの手で小屋を建てて独居した (ソロー, 1995a, p.9, 151; ソロー, 1995b, p.317). ソローは, ウォールデン湖での生活について詳細に書き纏め, 後に『森の生活』 (Walden) という著によって出版した. ここでは, その『森の生活』中の「読書」(Reading) の章において登場する, “uncommon schools” (Thoreau, 1971, p.108) という言葉に着目したい.

この村は, 子供だけがかよう, ふつうの公立小学校に関しては, 比較的まともな制度をもっている. しかし, 冬期にひらかれる餓死寸前の市民教養講座と, 最近, 州のお声がかかりでほそぼそと開館した図書館とを除けば, われわれ大人のための学校はなにひとつないのである. (中略) 人間が一人前の男や女になりかけたときに教育から離れてしまうことがないように, いまこそふつうの学校 (common schools) とはちがった大人のための学校 (uncommon schools) をつくるときである. (ソロー, 1995a, p.194)

ソローは, 住民達が住むコンコードの村に“uncommon schools”の設立が必要だと論じた. しかし, “uncommon schools”が具体的にどのような教育の場であるかについては, 明示的な定義がされていない. では, “uncommon schools”とは一体, どのような学校なのだろうか. この学校は, 具体的には誰に対して, どのような教育を提供するのだろうか. “uncommon schools”を日本の教育と比較したならば, どのようなことを見いだせるだろうか. そもそもソローは何故, “uncommon schools”の設立を提起したのだろうか. 本稿においては, この“uncommon schools”の定義を探りながら, この言葉に込められたソローの意図を読み解いていく.

2. “Uncommon schools”では誰が、何を学ぶか

まずは、“uncommon schools”という教育の場がどのような特性を持ち、どのような教育を誰に提供するののかについて考えていきたい。ソローは、“uncommon schools”を「子供だけがかよう」学校（ソロー, 1995a, p.194）と対義に挙げている。つまり、“uncommon schools”とは「子供だけがかわわない」教育の場、さらに言えば、様々な年齢や社会的バックグラウンドを持つ人々を包括する教育の場という意味で捉えられる。又、年配の住民も特別研究員になる（Ibid.）という記述も踏まえれば、“uncommon schools”では特別な教員資格を持たずとも教える者になれると解釈できる。従って、“uncommon schools”とは、誰もが学ぶ存在にもなり得るし、又、教える存在にもなり得る場だと分かる。加えて、『森の生活』で語られるソローの言葉は、道徳的完成主義を体現すると考えられている（スタンディッシュ・齋藤, 2004, pp.160-162）。道徳的完成主義とは、人は、完全な成熟に達することはなく、一時的な完成を達成し続けることで絶えず自己を向上させる、という考え方（p.161）。実際にソローは『森の生活』の中で、村における教育の乏しさについて住民達へ警鐘を鳴らしながら、プラトン（Plato）の『対話篇』を未だ読んだことがない、とソロー自身の学びの乏しさも吐露しており（ソロー, 1995a, p.191-192）、自らが完成された存在ではないことを強調している。ここで、成人年齢に達した者を「大人」（adults）とする。又、年齢に関係なく、目標に向けた成長段階に居る者を「おとな」（grown-ups）とする。

境界を絶えず越え続ける、自己超越の思想が示唆されている。それは、（中略）継続的に出立し続ける意味での完成主義である。（スタンディッシュ・齋藤, 2004, p.162）

スタンディッシュ・齋藤（2004）は、ソローによって体現された道徳的完成主義を、境界を越え続けるような営みだと述べた。つまり、大人（adults）も子どもも、目標という境界に向けて絶えず前進し、境界を越えた後には、又新たな境界に向かって進み続ける存在だと言える。さらに言えば、大人（adults）も子どもも皆、成長（growing up）によって目標を達成し続ける存在としてのおとな（grown-ups）達なのである。そして、道徳的完成主義の文脈上で語られた“uncommon schools”は、そのように成長し続けるおとな達（grown-ups）を包括する場所だと分かる¹⁾。

近年のグローバル化²⁾や GIGA スクール構想の実現化³⁾という背景を踏まえながら義務教育について考えると、産業界が設定した一定の到達点に向けて人材育成をする教育だと捉えられる。一方で、“uncommon schools”が提供する教育とは、生活において生じる個々人の必要性をそれぞれに充足するものだと定義できるだろう。このことは、ソローによって語られた「生きた知性」（living wit）（Thoreau, 1971, p.109; ソロー, 1995a, p.196）という言葉を読み解くことで理解できる。ソローは、「生きた知性」を次のような記述によって説明している。

趣味の豊かな貴族が、自分の教養を高めてくれるあらゆるもの一天才、学問、才知、書物、絵画、彫像、音楽、物理器具などを身のまわりに集めるように、村にもそういうものを集めようではないか。（ソロー, 1995a, p.198）

ここに記された「趣味の豊かな」者が「自分の教養を高め」という言葉は、「生活を送る中で」人が「自分の為に教養を高め」という意味として解釈できる。言い換えれば、教養を高める必要性が生活の上で生じ、その必要性をその都度、自身の為に充足する、という意味で読むことができる。さらに、この記述に挙げられた「天才」「学問」…「物理器具」といったものは、同じ時代や同じ場所に生きる人々、又はその者達によって生み出された産物という意味で捉えられる。それと同時に、遠い地域の人々や過去の人々、そしてその者達の試行錯誤によって生み出された産物という意味でも捉えられる。「生きた知性」とは、つまり、同じ今を生きている人々の知見と、過去に生きてきた人々の知見とを集積したものを指す。このように“uncommon schools”は、個々人が生活上の必要を満たせるように、様々な知見や知恵を収集して提供する場なのだ。又、ソローは、物事の内に秘められた真理を学び取ることによって、本当の意味で知的充足を得られると述べている（p.179）。従って“uncommon schools”では、「生きた知性」の真理を、言い換えれば、知恵や知識の本質を学ぶことが目的と

されているのである。

3. 日本の教育との比較

これまでの内容を踏まえた上で、次に、日本の教育現場と“uncommon schools”とを比較していきたい。これら間にはいくつかの類似点や相違点があると分かり、“uncommon schools”に関する理解をさらに深めていくことができる。

(1) 教育人間学概論Ⅱと“uncommon schools”

まずは京都大学における教育、教育人間学概論Ⅱでの外部講師の方々のお話と“uncommon schools”との共通項を探っていききたい。例えば、東日本大震災を経験した東北の方々のお話をオンラインでお聞きできたということは、聴講者が地理的隔離を超越して同じ時代を生きる人々の言葉を自らの思考内に回収できたということである。ここに、“uncommon schools”における「生きた知性」を「身のまわりに集める」営みとの共通点を見いだせる。又、外部講師の方々は、「自らも模索中である」、「自らも答えが未だ分かっていない」という言葉を口にした上で、その未知のことについて「皆さんはどう思いますか」と、学生を巻き込んだ対話によって講義を展開していた。この「分からない」という言葉は、自らが完全でないという意を含んでおり、道徳的完成主義の過程を表している。加えて、講師の方々だけがただ「教える」だけの立場にあるのではなく、対話を通して他者とともに成長していこうという姿勢を見せている点で、教える立場でもあり且つ学ぶ立場でもあるということの具現化と捉えられ、“uncommon schools”との繋がりを見いだせる。

さらに教育人間学概論Ⅱでは、医師の山内英子氏（聖路加国際病院）にもご講義を頂いた。山内氏の著『あなたらしく生きる』（2015）には、次のような言葉がある。

人と違うことがよしとされない日本の教育では、自分の個性を見つけるのは大変かもしれません。（中略）人はその違いを認めてもらうことによって、アイデンティティー、すなわち「自分らしさ」を形成して自信を得ていくのでしょうか。（山内, 2015, pp.82-83）

「人と違うことがよしとされない」という言葉は、近年の教育現場におけるグローバル化や GIGA スクール構想実現化といった変化の下で、子どもたちは社会が求める一定の完成形に向かって育てられている、ということに対する山内氏の疑問意識の表れだと理解できる。又、山内氏は、個性を認めることで子どもたちのアイデンティティーを形成する教育が必要だと述べている（Ibid.）。これはつまり、子どもたちがそれぞれに必要な知識を選んでその本質を学び、成長を繰り返すことによって、自己という存在を更新し続けられるような教育が必要だということではないか⁴⁾。従って、山内氏の言葉にも、“uncommon schools”の必要性を提起したソローの思想との共通点を見いだせる。

(2) 公民館と“uncommon schools”

さて今度は、社会教育法 第 5 章第 20 条において定義されている公民館に着目したい。社会教育とは、学校や家庭以外の社会全体で営まれる教育のことだ（市川ほか, 2010, pp.94-99）。公民館は、社会教育施設の内の一つとして挙げられる（p.99）。実は、社会教育法による公民館の定義を詳しく解釈すると、日本の社会教育の場としての公民館と“uncommon schools”との間に、共通点があると分かる。

第五章 公民館

（目的）

第二十条 公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会

福祉の増進に寄与することを目的とする。(市川ほか, 2010, p.487)

この定義では、公民館での学びが、住民の生活に即した多様な分野の内容を扱うと述べている。この点についてまさに、個人の生活上の必要性を充足する為に多様な知識や知恵を提供するという“uncommon schools”との共通点を見いだせる。又、ソローは自身の著において、人々が「生きた知性」によって「やがては天国に昇ること」(ソロー, 1995a, p.186)ができるかもしれないと述べている。社会教育法にある「住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化」(市川ほか, 2010, p.487)という記述にソローの言葉を当てはめるならば、学ぶ者が「生きた知性」を取り扱った結果「天国に昇る」過程を経験することだと解釈できる。さらに言い換えれば、公民館においても“uncommon schools”においても、多様な知見や知識の本質を学ぶことで、住民は目標を一つひとつ達成し、自己という存在を更新できるということだ。さらに、文部科学省(2021)は公民館について、世代を問わず住民皆に開かれる場所だと述べている。様々な立場や年齢のおとな達(grown-ups)を包括するという点においても、公民館と“uncommon schools”とは共通する。しかし一方で、公民館と“uncommon schools”には相違点もある。社会教育法では、公民館で学習した内容が生活文化の振興や社会福祉の増進に還元される(市川ほか, 2010, p.487)と記述されている。つまり、公民館での学びが公への還元を前提としているということであり、この点については、個人の必要性の充足に焦点を当てた“uncommon schools”とは異なると言える。

4. 何故ソローは“uncommon schools”を提起したのか

では、何故ソローが“uncommon schools”の必要性を説いたのかについて考える。ここで、吉田(2019)による記述を見ていきたい。吉田は、日本の公民館を、多様な学習・文化事業を通して住民同士の交流を提供する場所とし、加えて、日本の公立図書館を、資料や文献への住民によるアクセスを可能にする場所だと述べている(吉田, 2019, pp.189-190)。対して、海外の公立図書館については、住民が資料や文献へアクセスできると同時に、他の住民との対話にもアクセスできる場所であり、まるで日本の公民館と公立図書館との要素を兼ね備えた場所だと語っている。さらに吉田は、海外の公立図書館について、住民同士の対話の場所としての側面が重視されるようになったのは近年のことだ、とも記述している(p.190)。ここで、ソローの『森の生活』に目を向けると、図書館(a library)という記述が登場していることから(Thoreau, 1971, p.108; ソロー, 1995a, p.194)、ソローの生きた時代のアメリカには図書館が存在していたと分かる。しかし、吉田(2019)による記述を合わせて考えれば、アメリカの図書館に内在する、利用者同士の交流の場の提供という側面が、当時は十分に注目されていなかったと解釈できる。実際にソローは、コンコルドの図書館を「ほそぼそと開館した図書館」(the puny beginning of a library)と形容している(Thoreau, 1971, p.108; ソロー, 1995a, p.194)。これは、コンコルドの図書館について、住民の対話が盛んでなく活気の無い状態にあることを言い表しているのではないか。従ってソローは、当時のアメリカの図書館に内包される、対話の場の提供という側面が促進されていない状況を憂いて、“uncommon schools”の必要性を説いた、と考えることができる。

5. おわりに

今回の考察では、ソローが提起した“uncommon schools”について以下のことが明らかとなった。第一に、“uncommon schools”とは成長し続ける者達に開かれた場所であり、皆が教える存在でありながら同時に学ぶ存在でもある場所だということ。第二に、多様な分野にわたる知識を扱い、人々はその知識の本質を学ぶことで目標を絶えず達成し続けることができる場所だということ。第三に、教育人間学概論IIの外部講師の方々の言葉には、様々な知見や知識を人々の手の届く範囲に集めるという点、教える者は同時に学ぶ側の存在でもあり、成長し続ける存在であるという点、そして、学習を絶えず行う過程が自己という存在の更新の為に必要であり、それを促進する教育の場が必要だとしている点について、ソローの言葉との共通項を見いだせることが分かった。又、第四に、成長し続ける人々皆に開かれた場である点や、様々な分野の知識を取り扱う点、その知識に

よって住民達が成長して目標を達成できるようにする目的がある点から、“uncommon schools”は日本の社会教育の場としての公民館との間にいくつかの共通点を有すること。そしてこのことを踏まえると、第五に、ソローは当時のアメリカの図書館に内在する、住民同士の交流の場という側面が十分に振興されていない状況を懸念して、コンコードの村に“uncommon schools”の設立を提起したということが分かった。

最後に、半年にわたる教育人間学概論Ⅱの講義や、今回のソローに関する考察を通して感じたことを述べた。教職課程にいる教育実習生として、京都大学で学ぶ学生として、そして、今を生きる一人の人間として、自らが教育や人の生をどのように感じているのかを言葉にし、深く考察できたことはとても価値あるものだった。さらに、思考を言葉にすることによって、「このような表現を使えるのか」、「このように考えているのか」等と自己の意外な一面の再発見に繋がり、非常に面白かった。教育人間学概論Ⅱの講義の中では、学生や先生方、そして外部講師の方々がどう考えたり感じたりしているのかを、年齢や社会的バックグラウンドを超えて対等な立場で話し合えたことが非常に有益だった。外部講師の方々のお話や、それを受けて話し合うグループディスカッションでの内容は、その時・その場の表情や声色も含めて完全には再現不可能なので、流動的と言える。しかし、それを後に『森の生活』という文献、つまり、手に取ればいつでもそこに“文字”があるという固定的な形で振り返り、再度流動的なディスカッションに還元することができたので、非常に効果的で深い学びだった。教育人間学概論Ⅱを受講して私自身が思考したことや感じたこと、又、今回のソローに関する考察は、決して完成されたものではない。従って、大学での学びに限らずこれからの人生をも通じて、他者との対話を繰り返しながら、教育の在り方、子どもたちとの関わり、自己という存在への認識、そして、生きるとはどういうことかについて考察を続けていきたいと思う。そうしてブラッシュアップされていく私自身の考えが、同じ今を生きる誰かの、或いは未来を生きる誰かの元に届き、その者の生活を充足する「生きた知性」になったならば本望である。

註

- 1) 飯田 (1995a) は“uncommon schools”を「大人のための学校」(p.194) と訳した。しかし 2. で述べたように、“uncommon schools”の対象は、大人 (adults) や子どもといった年齢によって限定されない。ソローが言及したのは、自己を向上し続ける全ての「おとな (grown-ups) のための学校」である、という点に留意すべきだ。
- 2) 移動手段の発達やデジタル化といった現代社会の動向に伴って、世界規模での人流や物流が活発になっている。日本の教育現場においても、より世界に開かれた社会の中でこれから生きていく子どもたちについて、グローバルな意思疎通、意思形成、異文化理解、社会貢献ができる人材を目標とし、そのように育成しようとする動きが活発になっている。詳細は、文部科学省 (2012) 『グローバル人材の育成について』2022年5月14日閲覧、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryoku/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf
- 3) 文部科学省は、社会のグローバル化やデジタル化という状況に対応して、教育の場での ICT 活用をさらに活発にしながら、日本国内における ICT 環境整備状況の地域差を縮小しようとしている。又、デジタルによる学校現場全体の連携を促進することで、教師や子どもの力量を最大限に引き出そうとしている。近年の新型コロナウイルス蔓延の状況下において、GIGA スクール構想の実現に拍車がかかった。詳細は、文部科学省 (2020) 『GIGA スクール構想の実現へ』2022年5月14日閲覧、https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf
- 4) 自己という存在が完成されること決してはなく、あくまでも人々はそれを「更新し続ける」のである。何故ならば 2. で言及したように、人は一時的な完成の過程を絶えず体験する存在だということが、ソローの言葉によって分かるからだ。

引用文献

- 市川須美子ほか (2010) 『教育小六法〈平成22年版〉』学陽書房。
- 文部科学省 (2021) 『公民館の振興』2022年5月14日閲覧、https://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/001.htm
- スタンディッシュ、ポール・齋藤直子 (2004) 「発達・超越・日常性：カベルによるソローの『ウォールデン』の再解釈」『近代教育フォーラム』no. 13, pp. 159-168.
- Thoreau, H. D. (1971) *Walden*, J. Lyndon Shanley (ed.) (Princeton, NJ: Princeton University Press).
- ソロー, H. D. (1995a) 『森の生活 (上) (ウォールデン)』飯田実訳, 岩波書店。
- ソロー, H. D. (1995b) 『森の生活 (下) (ウォールデン)』飯田実訳, 岩波書店。
- 山内英子 (2015) 『あなたらしく生きる』日本キリスト教団出版局。

吉田右子（2019）『占領期公民館構想における図書館の位置づけに関する批判的再解釈』『図書館界』vol.71, no.3, pp. 189-203.

(かみやありさ 京都大学農学部森林科学科)